

家庭内行事としての正月の調査研究

デザイン学科

車 政 弘

1. はじめに

正月行事は夏の「お盆」盂蘭盆（うらぼん）とならんで、他の年中行事に比べ、一般的に国民的な広がりがあるものだといえることができるだろう。

正月行事の行い方（しきたり）と、そのときの飾り方（しつらい）は全国的な共通性があるとも見えるが、各地の行事はそう簡単に同じ様なものであるとはいえないようである。

正月行事は全国的な共通性は持ちながらも、その地方、地域の精神的風土、ないしは伝承と深く関わりあって成立してきたものといえないだろうか。またこのことは当然ながら、決して一定不変ではありえず、絶えず創意が加えられてきたことも事実であろう。その一方では諸々の社会的な変化にともなって、形式化、形骸化していくものもあると考えられる。また単に社会的変化による形式化、形骸化ではなく、家族観、生活観の変化によって積極的に合理化、簡素化していくことも考えられよう。

ハレの日、ないしはハレの日の前後の過ごし方を見ることによって、暮しに対する考え方、意識が少しは見えるのではないだろうか。

そして、何よりも住生活に対する意識がそこに読み取れるのではないかと考えられる。

インテリアデザインの主要な命題は機能的で、合理的な居住空間を作っていくことであると同時に住空間の演出をどう行うかということである。

とするならば、正月行事のようなハレの日には、住まい手自らがなんらかの方法で、積極的に、あるいはさして意識せずとも住空間の演出性を高める時であり、これを調査することは、現代のインテリアデザインの諸々の問題点を考える上で、手

がかりが得られるのではないかと考える。

この報告では、現在の、主に北部九州の正月行事の行いかた（しきたり）と飾り方（しつらい）の概要を把握しておきたい。

2. 調査概要

2-1. 予備的作業

正月行事に関する行為、行動にどのようなものがあるのか確定するために、つまり正月行事に関する質問項目を確定するために、まずいくつかの正月行事の態様の聞き取り調査をおこなった。

調査の対象は地域の旧家であることが望ましい。それはあるていど旧来の慣習が保たれていることが予想されるからである。また、かつての慣習の記憶も保たれていることが考えられるからである。

この事例の中に、正月行事に直接関係しない記述もあるが、生活全体のイメージが分かるよう、そのまま残すことにした。

以下の聞き取り調査はいずれも1987年のものである。

以下調査事例の概要を述べる。

事例1

大分県日田市豆田町

草野家（大分県指定有形文化財、大分県最古の商家）草野覚子さん談

寛永18年（1614）豆田町に入り魚町に住み、元禄初め（1688）現在のところに屋敷を構えて今日に至る。

屋号は升屋、商標を「田」（かくじゅう）と定め製ロウを業とし、京、大阪まで広く販売していた。傍ら掛け屋として郡代御用達をつとめ、この間幾多の窮民救済や治水の公益に尽くした。家には仏

教信奉と親孝行の二つの家憲があり、代々忠右衛門を襲名し、十九代に至っている。

家にはいると、すぐ左手にロウ作りの道具が展示してある。明治末に先々代が亡くなったためにロウ作りをやめた。従って帳場の事はよく分からない。

正月前には分家から塩ブリを持ってくるしきたりがあった。それを吊しておく竹の竿が保存されている²⁾。

餅つきは現在は電気でやっているが、かつては表の土間でついていた。柄のついた杵でついていたのではないようで、倉に残されているカシの棒が杵である。カシの棒で5、6人でついていたのであろう。つきたての餅を手でもって街中を走って行った男の話が残っているが、おそらく棒で餅をつかけて走ったのであろう。よく蒸した米なら棒で十分持てるものである。女の人をからかって追いかけたとも聞いている³⁾。

いまは手で返すやり方だが、棒は餅を返す道具としても使われていた。

餅つきの時、「手温め(てぬくめ)」という餅にあんこをかけたものを使用人にあげていた。

かつては大きなお鏡は角帯で輪を作り、型とした。また小さなお供え用の餅は竹のリングを型として使っていた。

鏡餅の飾り方は三宝に白い紙を敷き、小餅を敷いてウラジロ、ユズリハで飾り、重ねの餅の上にダイダイを置く。神棚と仏壇には重ねの餅を用意しミカンを乗せる。普段から、御仏飯の数は3対で正月も3対のお供えをする。

注連飾は市販のもの(博多と同じではないか)を使う。門松はないが、松の枝を奉書で包み水引きで結び、それを門口に1対飾る。

正月には、かつて郡代の為につくられた新座敷の「上の間」の床の間には、宗親翁(絵像)を掛ける。これを「縁のおじい様」と呼んでいる。またその両側には二代目の夫婦の像を掛ける。お盆と正月には必ず祖先の「お絵像」を掛ける習わしである。

また広い屋敷の各部屋にある11カ所の床の間に

もそれぞれ正月らしい掛軸を掛ける。

昔は水神様も荒神様もあったがこれには特にお供えや御飾りはしなかったのではないか。

現在、学校の経営をしているので、正月の準備は24日の終業式が終わってからになるが、以前は上女中がやっていた。

草野家のしきたりは姑からでなく、「白いおばあちゃん」と呼んでいた人から教えてもらった。

正月の飾りは10日ぐらいに片付ける。11日に御鏡開き。

餅は28日か29日につくが、午の日は日が荒いからせいろの火を炊かない。

31日紅白歌合戦を見て、年越し藁麦を食べ、「福茶」⁴⁾を茶菓子とともにいただく。大原さんにお参りして除夜の鐘を聞いたなら、お経(しょうしんげ)(真宗、お東さん)をあげ、「お絵像」にお参りする。

元旦はまず仏壇を拝み、神棚を拝み、そして御屠蘇をいただく。

今は19匁の金杯を使うが、朱塗りの杯の方がいいと思う。かつては錫の銚子を使ったこともある。これは婚礼のときに使った。屠蘇の他は特に何も無い。

雑煮を食べるときは柳の箸を使う。

主婦の正月は忙しかった。かつての主婦は1月20日ごろに外に出られればいい方だった。

神棚の掃除は御主人がする。元旦は名刺交換会、学校関係の年始があり、家では特に何もしない。

年末には目無しだるまを買ってくる。これは学校の志願者数が多くなりますようにとの願いからである。

現在は夫婦と次男夫婦と孫が3人の家族構成である。以前は長男と長女を含め9人家族であった。

事例2

大分県日田市南部町 高瀬家

高瀬重市さん(71才)談

高瀬家は海拔300メートルのところであり、松原ダムとだいたい同じ高さであり、柳又ダムはこの20メートル下にある。山林は100町歩程度。杉山

の経営と米、柚、その他しいたけ、竹の子、ぜんまい等を産する。

高瀬家は、ふるくは弁財吏（べんざし）で、江戸中期になってから小庄屋という名称になった。「名子」制度は江戸になっても続いていた制度である。「名子」とは一種の小作者のようなもので、仕事の内容は、山林の管理をはじめ田畑、屋根葺き、大工、家具、薪作りなどであった。「弁財吏」は「名子」の結婚から、家作などの指図までするもので、その風習は昭和初期まで続いていた。

天保5年に代官、庄屋という行政機構に組み込まれ、小庄屋と呼ばれるようになった。明治になってから、「名子あがり」が奨励され、「名子」は農山村の産物を加工、販売しそれをもとでに独立していった。

和服をきていた頃は、年末になると奥さんが自分で子供の新しい着物をつくっていた。正月用に新しくするものはこの他、下駄、タオル、足袋であった。

年末30日には「合倉」（ごうくら）と納屋の間に二間以上の竹を渡し、それにウラジロ、ササ、松にアオキを下げ、ダイダイを中心に飾る。これは1月15日まで飾っている。

大晦日には「名子」があいさつにきていた。この日は大根の煮生酢と酒を出してもてなした。

大晦日の晩は倉の戸を開け、また水車小屋の戸も開け、唐臼に米を入れておく。福の神が舞い込むようにということと、年を越せない人の為に施しをするという意味が込められている。これと同じ事は旧9月15日の名月の晩にも行われる。「ミギニチ」といい、この日だけは畑の作物を盗んでもいい日となっている。

大晦日には「歌合戦」をみて、元旦はいつまでも寝ている。

昔は元日の朝7時か8時頃近所の子供達が「よい春になりました」と言ってくると1人に4、500円のお年玉をやり、ミカン、カキその他を配っていた。

元日の朝、男が10時頃に床の間と玄関にお飾りをする。氏神様には床の間よりも少し小さめの鏡

餅を供える。この辺りでは正月に限らず、お祭りがあると、餅をつき、それを割って配るという風習があった。床飾りは、三宝の上に昆布をしき、ユズリハ、ウラジロを載せ、その上に鏡餅を置きダイダイを載せる。

庭にある「山の神」、「道祖神」、座敷に祭ってある「毘沙門様」にも御神酒を上げる。

飾りが終わると「歯がため」をする。「歯がため」は、茶を飲み、するめ、カキ、ミカンを食べる。かつては串柿を食べた。

屠蘇酒は長幼、男女の順で回す。例えば、祖父、父、長男、次男、祖母、母、長女、次女の順。

雑煮は昆布、イリコだしの醤油味で、昔は青みだけを入れたが、今は鶏肉、蒲鉾、青物が入る。その他の料理は、鯛かイトヨリ、数の子、きんぴら、ガメ煮、黒豆、ごまめ等である。

市内の大原神社に元朝参り（がんちょうまいり）に1時か2時くらいに行く。今は太宰府と宮地獄にもお参りする。高瀬家は浄土宗だが、正月にお参りする順序は、氏神様、家の中の神棚、仏壇の順序である。この他屋敷内の山の神、道祖神には御神酒を上げる。

正月にはクワイを食べない。

2日は「仕事起こし」。牛の道具を作る。牛の道具とは、みずなわ、ひきおのおもとで、また穴開きのお金を通す縄をなう。

10日には恵比寿様をお祭りする。

11日に鏡開きをする。塩味の「小豆雑煮」を作る。「帳祝い」もこの日に行う。

「帳祝い」は大福帳や山林経営に関する日記帳などを床の間に供え、御神酒を上げる。

20日には十数軒で「うたい起おし」をやっていた。今日では正月2日に行う。

正月7日までの間に兄弟、本家、母、叔父、叔母、山の世話をしてくれる人の所へ挨拶に行く。

八朔節句には用水の出るところ（田や畑にも）に御神酒を上げる。

不動様、荒神様には旧3月28日、御地蔵様には、毎月24日お参りをする。

弘法大師は8月21日。御堂が村にある。

庚申様が田圃にある。

山の神様を拝むのは、1月16日と12月8日である。古くは、子供が3才になると、指物が出来る「名子」に膳を作って貰った。

村人たちは樽をかつぐ竿を作ったり、シュロの皮をはいて箒を作り、木挽や農産物を売る等の仕事をした。

事例3

福岡県粕屋郡須恵町 田原家

田原貞敏氏 (64才) ひさよさん (62才) 談

正月行事に関しては大正7年になくなったタカさん(御主人の祖母)の正月料理に関する書付けがある。

「拾二月廿九日の夕うんそばと ほしがきと大根のおにしめ

一月一日朝

はちのもりかた うめぼし。こぶとするめ。その丈一寸巾二分ばかりにきる。つるしのかきみそづけ大根。たちはぎ。こみかん

お茶の時ハ 黒豆とやきたるもち

あずきのもちをひしにきりたるを

おぜんにひきつけ。其時ニあずきぞうに

おぜんのこんだて

はがため大根丈二寸五分巾四ワリ。

大豆ほとばかしたる拾つぶづつのせる其の下ニゆすり葉ともろむき二羽づつ

×おしるのいも。大根。にいじん。たんじゃくにきる。そぎごんぼう。

おなますかずのこ。おとそ

おひる

白のごはん おなます しをの肴のおひ口

夕 おちやづけ

一月二日

かつをなのおしる。ゆわしをやきてつける。白のごはんにおなます。

一月三日朝

おみいに もちを入れる おなますに白のごはん

七日は ななくさじる なますに白ごはん

拾四日は朝ハ ごはんたいたる上にもちを入れる

そのもちをつまみきりて

お神様や皆皆さんにつける

拾五日 あずきのごはんに大根のみそづけ」

・贈答の習慣一戦前は上須恵内でお歳暮をする習慣があった。遠方の親戚とのやりとりはなかった。中には立派な焼物をくれた人がある。戦後は親戚とのやりとりがあり、お歳暮の品は砂糖、石鹼、ちり紙等のような生活必需品に変わった。

・衣服の新調一昭和24年に長女が生まれた。その後毎年着物を奥さんが縫っていた。御主人が子供の頃には下着と下駄が新しいものだった。

・正月のために用意する日用品一クリノキの箸「クリハイバジ」を作っていた。「くりあいがよくなる」とか「かちぐり」という縁起をかついでいた。この箸を正月の7日間続けて使っていた。

・すす払い一正月2, 3日前, 祖母が神棚や庇の部分箒の葉の箒ですす払いをしていた。

・縁起物は特に買わない。

・餅一いまは買っているが、大正初めまでは、夫婦で1升の餅をつく習慣があった。(田原さんは大友氏の流と関係があり、大分のしきたりと関係があるのだろうか) 小作人と近所の人が7, 8人1俵ぐらい1日かかってついていた。その日は餅つきが終ると酒と食事を出していた。その餅を東京の叔父のところへ贈ろうとしたら「丸餅は駄目だ」というのでやり直したことがある。餅つきは、女も男も作業した。

博多でみられたような年末に各家々を回り、餅をつく「賃づき」はなかった。「賃づき」といえば、単に正月前の賃仕事と言うばかりでなく、行った先でいい娘さんを見つけることもあったという。

餅つきに関する禁忌一丑の日は尾を引くから餅をついてはいけないという言い伝えがある。これを「丑どん」という。

注連飾一今は博多と同じ様なものを年末に買う。かつては長い竹ざおに藁を七五三の順に吊し、そのあいだにユズリハ、ウラジロを交互に下げた形のものがあったと思われる。染め付けの壺にその様なものが描かれている。

注連飾を処分するのは1月7日の早朝行われる「ホケンギョウ」または「ホッケンギョウ」と呼ばれる、いわゆるドンド焼きの時である。この時正月の書初めの紙も焼くが燃えた灰が高くまで昇ると、字が上手になるといわれる。

「ホケンギョウ」は子供達だけでやるもので、子供が火傷したり、死んでしまったことさえあるという。

・門松—門松はないが、松竹梅にゆずりはを奉書で包み水引きで結ぶものがある。近所では松の葉にうどんこをまぶし、これらを花瓶にいれ、神棚に上げるのを見たことがある。

・鏡餅—玄関に飾る。八寸の三宝「さんぼう」の上に、ウラジロ、ユズリハを敷き、三つ重ねの鏡餅を置き、その上に「お年玉」(おひねりで、中には米、するめ、昆布が入る)をおき、横にダイダイをそえる。

・その他の鏡餅、お供え—床の間には、五寸くらいの三宝に玄関の場合と同じように鏡餅を飾る。現在、仏壇、神棚には小さな二重ねの鏡餅1対を飾るが、仏壇の「おひねり」にはするめは入れない。

便所には「びっかご」という、縄を編んでルーブ状にしたものを取り付ける。

庚申様、天神様、水神様、お稲荷さんにはご飯をいったん上げ、それを下げてゆでた餅をお供えする。

装飾—床の間には松尾晃華の三福の掛軸を掛ける。中央に皇大神宮、左に八幡様、右に春日権現の配置となる。前は皇大神宮だけだった。また、七福神の掛軸を掛け、その前に七つのお供えをした。

鏡餅の左隣に、三宝のうへの瓶子に御神酒をいれてお供えをした。

現在、床の間の右隣にある違い棚のところに盛り花を飾る。

・大晦日—昔は「ノゴロミ」という福迎いの風習があったが現在はない。夜には運蕎麦を食べ、早く寝る。

・初詣—最近では2日に三社参り(須賀神社)にい

く。おばあちゃんは四王寺に3日の日に行き、焼きアゴを持ってきていた。1日は初詣には行かない。

・若水汲はしない。

・朝風呂—元旦風呂に入るが、雑煮を食べて昼ごろにはいる。風呂の中には何も入れない。

・「歯がため」—現在はしないが、お祖母ちゃんの書付けではかつてあったことが分かる。

・正月の挨拶—御主人の父親の世代では家族に対して年頭の挨拶があった。しかし現在では、正月の挨拶は特に改まってはせず、朝起きて来て「おめでとう」という。どの神様も先に拝むという訳ではなく、御主人は外を回って順次拜んでいく。玄関の鏡餅と床の間のそれも拝むが、願い事をするというわけではなく、自らの気を引き締め、謙虚な気持ちになるためである。

・屠蘇—屠蘇は昔から買っていた。三宝の上に錫の瓶子と塗りの杯を乗せる。屠蘇を飲む順番は男女の別なく、若いものから順に飲む。

・お年玉は別に用意はしない。

・雑煮—今はアゴと昆布でダシをとり、ブリにカシワのブツ切り、カツオ菜、焼き豆腐、椎茸、蒲鉾がはいる。姑の時代は、かしの雑煮で庭野菜が入っていた。その前の世代は、アゴのだしでブリが入っていた。おそらく戦争中にブリが入らなくなり、カシワの雑煮になったのではないと思われる。

・料理の種類—ご飯、重箱にがめ煮、寒天、黒豆。なま酢、数の子。お盆にウラジロ、ユズリハを敷き、大根を4つ割にしたものと手前にほとばせた大豆を置く。この大豆の残りは梅干しの汁につける。

・正月行事の行われる部屋—いつも食事をする控えの間(かつての台所)で屠蘇を飲み、食事をする。琉球塗の盆を使うが、以前は紋付の高膳に漆の食器で料理を食べていた。現在も20揃えのものが残っている。

・箸—栗箸

・正月の遊び—昔は男はコマ回し。女の子は羽根つきをしていた。

- ・年始一里に年始に行くことはあった。現在の御主人の仕事の関係で年始はなし。
- ・七草がゆーブリの頭と骨をいれ、7種類の野菜をいれ味噌汁とする。特に言われているような七草ではない。フツをいれていた。
- ・鏡開き—11日に鏡開きをしていた。内容はぜんざい。

事例4

福岡県粕屋郡須恵町 印藤家 大正元年建築の農家

印藤弥寿男さん(53才) 弘子さん(48才) 談

家族は子供が3人、娘(24才)、娘(22才)、息子(16才)。御主人は7人兄弟の3番目の長男。後は皆姉妹。

奥さんの里は福岡市早良区飯盛で、4男1女の長女。奥さんが嫁にきてすぐ姑がなくなったためにしきたりの引継は受けていない。

・贈答の習慣—贈答の習慣としては、戦前から、身近な親族だけだったと思うが、例えば弥寿男さんの祖父の兄弟、母の里には「親から預かってきました」と言って焼きアゴと重ね餅を持って行った。母の里には少し小振りな重ね餅だった。もって行く家に両親がいれば二重ね、片方だけあれば一重ねだった。30日か31日に持って行った。暮れと盆前に10軒くらいに持って行ったと思う。

盆には下駄や鯉節を送っていた。母の里は神道(護国神に供える)だったから線香を持って行かなかった。ここの家から出た(分家した)人が焼きアゴと重ね餅を持って、「正月を無事に迎えることができます」と報告に来るが、その人たちへの返礼として物をあげるという習慣があるのだと思う。

・衣服の新調—昔は下駄を親から買ってもらっていたと思う。お盆には娘がいる家ではゆたかを買っていたようだ。

・その他の日用品の買い換え—神棚用の折敷を買う。それと「クリハイバシ」を買う。

・年末の準備—全体的な飾りは28日に、御主人が子供たちに分担させて行う。特に神棚は主人の仕

事であり、仏壇の飾りは主婦の仕事になっている。(暮しを支えてくれた祖先に対して、その家の主人以上に嫁が尽くすと言う意味か)

・縁起物—だるまを買うことは商売をしていた時にはあったが、この家ではない。

初庚申(60年に1回)には、藤崎の猿田彦神社で新年明けてから、猿面を買う。よその部落には潮井テボや彦山のガラガラであるが、この家では掛けてはいけない。

・餅つき—30日に土間で餅をついていた。かつては2俵くらいついていた。この内、5升くらいは栗餅やかき餅であった。御主人と奥さんの共同作業で、餅をかえしたりするのは奥さん。兄弟の餅も5升ずつつく。この内1升はアンコ餅で、小豆は1升用意する。最近では機械でつく。

※31日の午前中の仕事は、カシワを絞めること。

・注連飾—注連飾は御主人が小さいときから買ってきたみたいだが、作った記憶もある。注連飾は母屋の玄関だけにする。お宮には当番の氏子が飾りに行く。注連飾は小正月(15日)、ホッケンギョウまで飾っている。

・門松—今は門松は立てないが、戦前は門松だけで注連飾はなかった。抗を打ってこれに松竹梅を結わえる形式のものだった。

・鏡餅—床の間の鏡餅は「歳徳様」と呼び、三宝の上にまず1升の米を敷き、その上に餅を乗せる。重ねの餅の間に30cm位の長さに切った毘布とスルメを挟み、一番上にダイダイと柿を乗せ、中心に米をいれたお捻りを置く。

・その他のお供え—仏壇には父方、母方の意味で二重ねずつお鏡を供えるが、餅の上にはスルメを除いて、米と毘布をいれたお捻りを置き、みかんと干し柿を添える。仏壇の場合は脚の高い桶状の器に乗せる。

大黒様には二重ね。皇大神宮には五重ね。お寺の納骨堂に(かつてはお墓に)8寸くらいの鏡餅。庚申様には1升5合の餅を3つに分け、三重ねのお供えにする。以前は畜舎に一重ね(半紙をしたに敷き、上に小みかんを置く。)供え、粃倉に一重ね、唐箕に一重ね供えていたが、唐箕を使わなく

なったので、今はコンバインの上に供えている。
(唐箕やコンバインは農具の代表として位置づけられている。)

昔は小さな餅を12個作り、牛の餅としていた。
元日の朝にハミに混ぜて食べさせた。

今は、子供の机の上にもお供えをする。

- ・床の間の飾り一床の間には、掛軸を掛ける。正月用の軸は3本、「松竹梅に朝日」と「翁、嫗」、「虎」がある。生け花(南天と松)を飾る。
- ・その他の飾り—自動車に飾りをつける。
- ・大晦日—大晦日に飾りが終わると、主人と息子で札を持って、博多の厄八幡(若八幡宮)に行き、お参りをしてから、夕飯の時にカシワのオスメに蒲鉾とハウレン草を入れた運蕎麦を食べる。また正月用とは違うガメ煮を食べる。
- ・初詣—家族揃って、太宰府、飯盛神社、岩崎さんに参る。宇美八幡にも参る。3時半から2時間寝て、それから、若杉様に裏の方から登る。帰ってきて、それから雑煮になる。
- ・若水汲み—今は若水汲みに類することは何もないが、小さいときは正月用の桶に井戸から水を汲み、これで顔を洗った覚えがある。クドがあったときは松葉で火を起こし、釜で沸かしたお湯で餅を煮たり、顔を洗ったりしていた。
- ・朝風呂—朝風呂には入らない。昭和23年にこの家に帰ってきて、昭和25年くらいに、内湯ができた。昼にはいる。その前は、正月には部落で風呂わかしを雇って、共同風呂に入っていた。
- ・お茶を飲む—茶を飲むことはない。
- ・歯がためはしない。
- ・拝む—1, 歳徳様, 2, 神棚, 3, 庚申様, 4, 仏壇の順で拝む。弥寿男さんの父親は年がら年中拝んでいた。
- ・御神酒—屠蘇は入れずに酒だけの「御神酒」を神様に供え、主人、主婦、長男(16才)、長女、次女の順にいただく。御神酒をいただく器は昭和25、6年頃は土器(かわらけ)だった。客用には漆器。
- ・正月の挨拶—「昔は親父が一言いっていた。」
- ・お年玉—お年玉は用意しない。お宮で祭典があって、獅子舞がやって来る。獅子舞に作った料

理を重箱に入れて出す。

・雑煮—雑煮には餅を2個入れる。主人は4個。今はカシワのだしに昆布、椎茸をいれ、ブリ、人参、焼き豆腐、蒲鉾、スルメを入れてそのまま。かつお菜をゆでて、入れるが、かつては主人は白菜だった。すぐわなない気がするが、かつお菜は「カギシイ、カギツイ」と言われた。餅はだし昆布をしいて煮て、椀に入れる。昔は焼きアゴのだしがあった。

・元旦の料理—黒豆、数の子、酢蕪はこの地方の言葉「スカブラ」(何もせずにぶらぶらしている様か)に通じるので作らない。ガメ煮は2日の客用として作る。

・正月行事の部屋—「ガイドコ」

・料理を食べるテーブル—「応接台」と呼ぶ大きな座卓。テレビの位置で主人の座が変わった。クリハイばしは使いやすいようにそぎ直す。

・正月の遊び—昭和17年まで百人一首。

・年始客—親戚の人が仏様参りに来る。

元旦は自分たちが仲人をした若い夫婦が来る。

・事始め—親父は志免炭鑛所長をしていたが、3日には仕事のはじめだから地下足袋ぐらい履けと言っていた。

・鏡開き—7日にはお庚様の餅を焼いて食べる。奥さんの里では庚申様の餅をあぶり、家に持ち帰って雑煮にしていた。

11日には庚申様の他の餅を下げる。割れた餅をふかして、アンコを入れる。11日お捻りの米を朝ご飯に使う。

以上4例の聞き取り調査事例をもとに調査票を作成した。

2-2. 調査票による調査

調査項目：主要27項目で、例えば、自宅の間取りを描いてもらうとか、正月飾りの形や材料にまで言及するというように、できるだけ内容が具体的に把握できるように記述する部分を多くした。

調査記録者：大半は、本学デザイン学科の学生と福岡市及びその近郊の大学、短大の学生で、学生の自宅での正月行事を記録したものである。し

たがって、話し手は学生の親、特に母親が中心で、話し手の年齢構成は30才代2.6%、40才代43.1%、50才代23.5%、60才代6.5%、70才以上20%無回答16.4%で、平均年齢は50.8才（30才以上の平均値である）である。

県別では、福岡県が60%を占め、佐賀、岡山、熊本、長崎、沖縄、島根、山口、大分などの県がこれに続く。

調査件数：約300の調査票を配布し、回収は153件とその半数であるが、この調査票が回答するのに時間がかかるという問題があり、この調査の主旨を了解してくれた人のみが回答する結果となっている。従って記録するのが面倒だと考えた学生、もしくは記録を依頼されても正月行事に興味がないか、自宅では正月と言っても特別なことがない、または何もしないということが考えられる。実はそうした事例がこの調査に組み込まれなければならなかったのだが、結果として、それは達成されなかった。

この調査が行われた住宅は一部集合住宅の例があるのみで、一戸建が大半を占めている。調査票の主な質問項目（基礎調査部分省略）は次の通り。

- 00 正月行事を自宅でしますか
- 00-2 クリスマスには家庭内で行事がありますか
- 01 年末にはお歳暮をしますか
- 02 年末には新しい衣類を用意しますか
- 02-2 その他の日用品の買い換えをしますか
- 03 年末に大掃除をしますか
- 04 縁起物を買いますか
- 05 餅をつきますか
- 06 注連飾（しめかざり）をしますか
- 07 松飾りに類するものを飾りますか
- 08 鏡餅を飾りますか。
- 09 その他のお供えをしますか
- 10 床の間を飾るものがありますか
- 11 大晦日に特別な食べ物を食べますか
- 12-2 除夜は何時頃まで起きていますか
- 13 初詣に出かけますか
- 14 若水汲みをしますか

- 14-2 朝風呂に入りますか
- 14-3 お茶を飲んで正月の挨拶をしますか
- 14-4 歯がためをしますか
- 14-5 元旦にあたり何かを拝みますか
- 14-6 屠蘇または御神酒を飲みますか
- 14-7 正月の挨拶をしますか
- 14-8 お年玉を用意しますか
- 15 雑煮を食べますか
- 16 元旦に食べる料理の種類を教えてください
- 17 正月の行事はどの部屋で行われますか
- 18 料理を食べる食卓はどのようなものですか
- 18-2 食器類は特別なものを用意しますか
- 19 箸はどのようなものを使いますか
- 20 正月には決まった遊びをしますか
- 21 年始に行きますか
- 22 事始めの習慣がありますか
- 23 いつまで正月だと思えますか
- 24 七草粥を食べますか
- 25 鏡開きをしますか
- 26 小正月の行事をしますか
- 27 女正月の行事は行われますか

3. 結果と考察

ひととおり調査項目の順に、調査結果をみて行きたい。

00 自宅で正月行事をしない17.0%

この理由は、1)家族はそれぞれ予定が異なる。2)正月は単なる休日。3)妻の実家に帰る。4)夫と妻の実家に帰る。そして、墓参りや親戚の人たちと年に1度会うという回答で、温泉に行くという例は1例のみである。無回答が14.4%であるが、後の設問から自宅で正月行事を行っている判断することから、YESの回答とみて差し支えないと考えられる。喪中の例はみられない。

00-2 略

01 年末の贈答の習慣がある家庭は69.9%、贈答の品物は、食料品、酒、日用品、商品券、衣類などである。

02, 02-2 年末に正月から着用する衣服の新調や、その他の家庭用品の買い換えは37.3%。

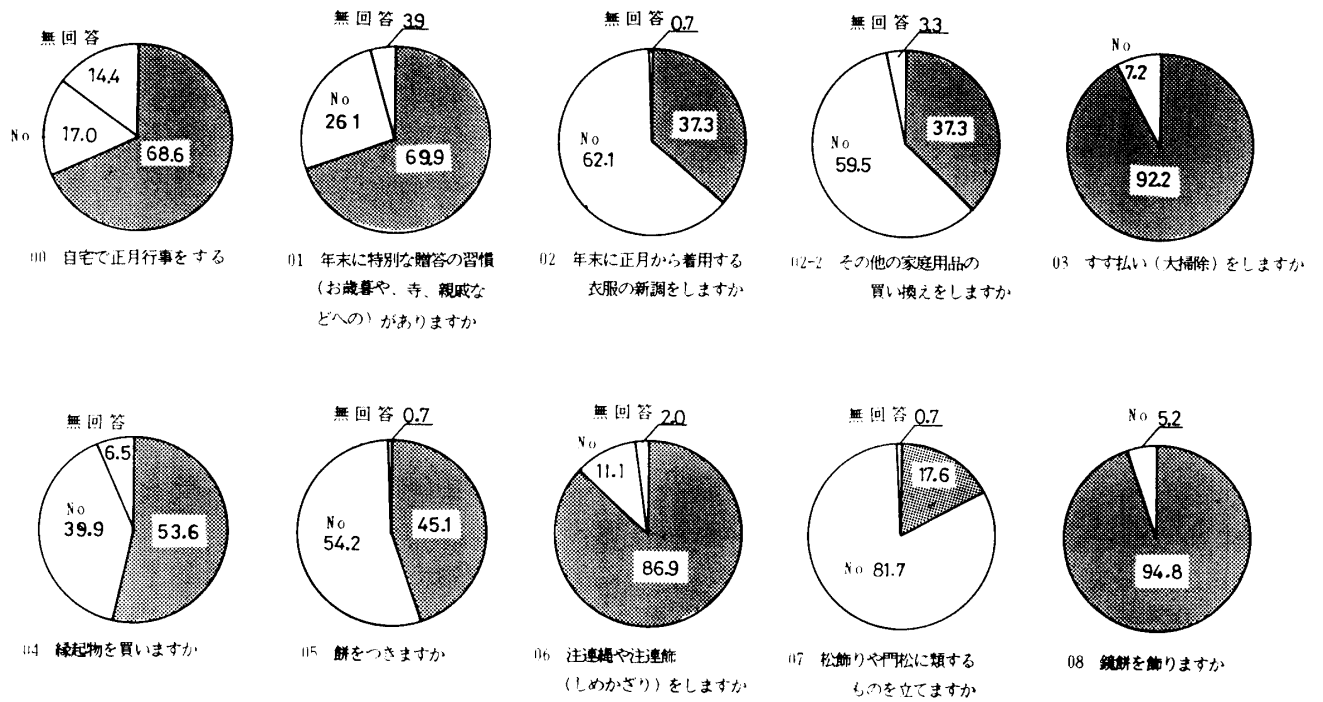


図1 正月行事の聞き取り調査回答—1
 ■は yes. (数値は%)

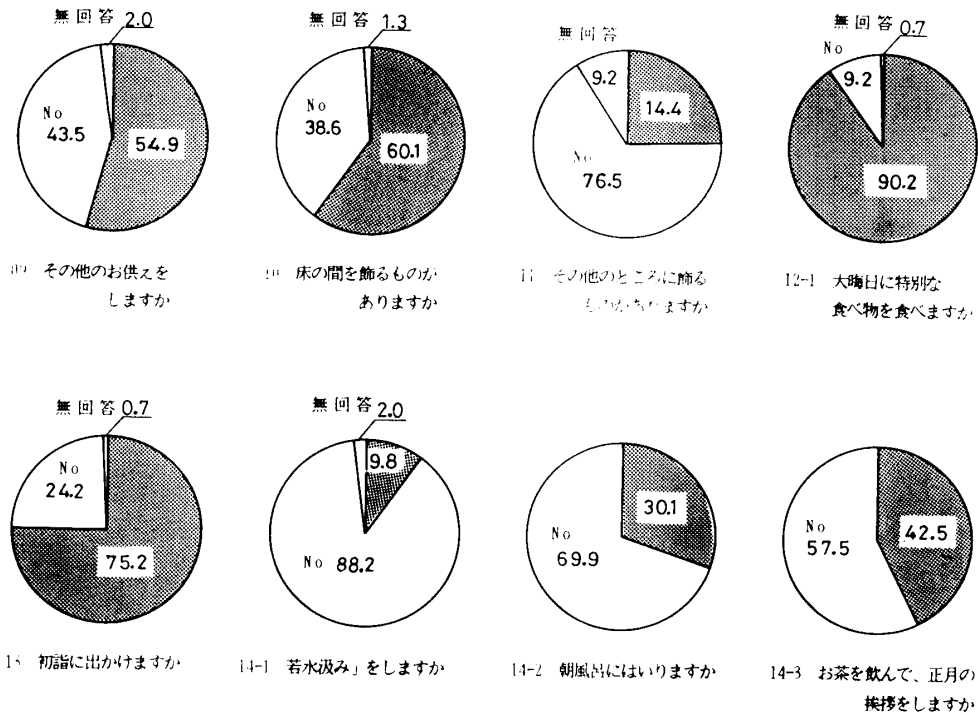


図2 正月行事の聞き取り調査回答—2
 ■は yes. (数値は%)

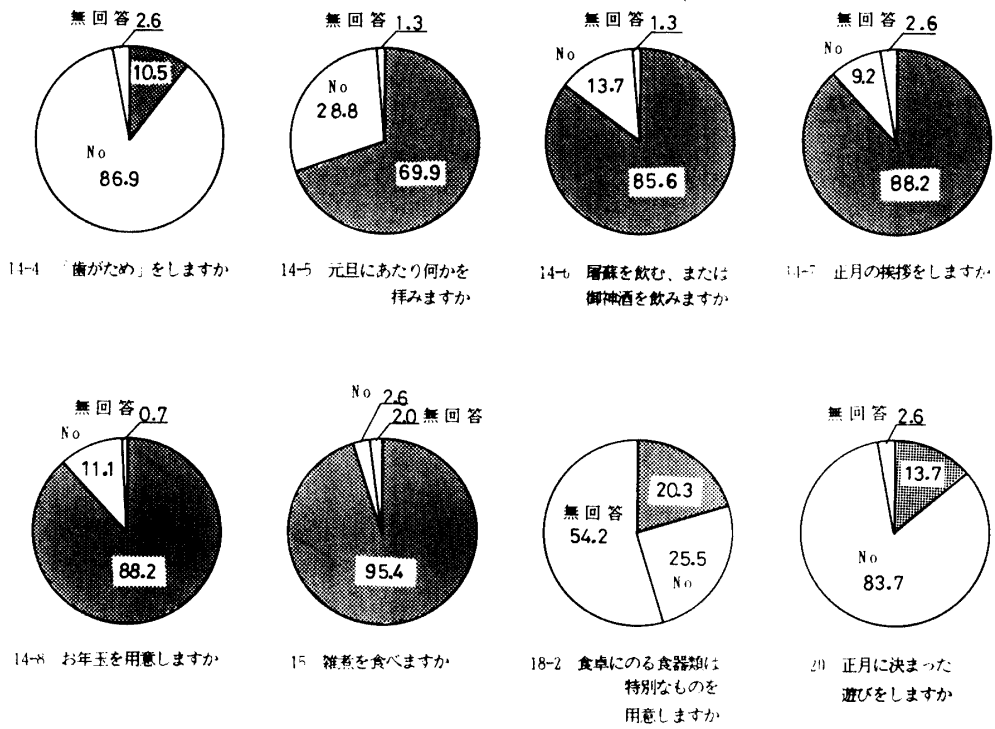


図 3 正月行事の聞き取り調査回答— 3

■ は yes. (数値は%)

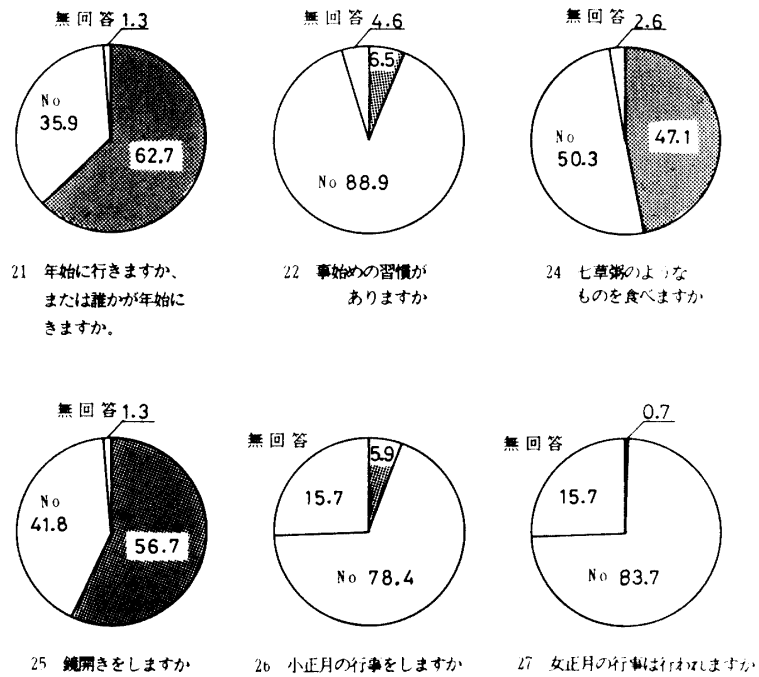


図 4 正月行事の聞き取り調査回答— 4

■ は yes. (数値は%)

03 年末にすす払い(大掃除)をする92.2%(141例)。しない7.7%(11例)。家族揃って大掃除をするのは70例(含各自分担して掃除をする)で、妻が主導するのは46例、夫と妻と回答したのは12例で全体として家族揃って大掃除をするのが特徴的である。

竹箒を使って神棚などを払い清める、いわゆるすす払いをする例は1例のみである。掃除機を使う63件、雑巾61件、箒を使う4例、はたきを使うのは20例となっている。つまり、かつての「すす払い」の形はなくなったが、掃除機という「電気吸塵機」を使い、年末には必ず大掃除をして、新年を迎えるということは共通した意識であるということが出来る。確かに、住まいのエネルギーの変化によってすすは生じない。払わねばならないのは「すす」から「ほこり」へと変化した。しかし、住まいの汚れを払い落とすのが新年を迎えるにあたっての、欠くことのできない行事の一つだということは変わっていない。

04 縁起物を買うのは53.6%で、半数を越える。

05 鏡餅をつく45.1%で、意外にも自宅で餅をつく家庭が多いが、これは家電製品「餅つき機」の普及がこのパーセンテージとなって現れているのである。そして、おそらく、年に一度年末になると、この餅つき機に「ハレ」の舞台が与えられるということになるのだろう。

餅をつかないと答えた54.2%の人のうち、9.6%が親戚、実家から、送ってもらうと答えている。あとは近くの店、スーパー、菓子屋、餅屋等で買う家庭である。

06 注連縄や注連飾をする86.9%で、この取り付けは夫の役割になっているといえる。誰が飾りますかという設問に対して、夫が89例で、妻が主導するケースは23例となっている。これは単に家の外仕事は男が担当するというふうにも考えられ、一方で歳徳神、歳神様を迎えるのは、男であるべきだという考え方が底流にあるのではないだろうか。子供が手伝う場合でも、男の子がこの仕事を手伝うという例がわずかであるがみられる。変わったところでは、組町がするという例があり、

集合住宅の場合と比較するとどうなるのか、興味深いところである。かつて、注連飾や注連縄が何日ごろ飾り付けられたかは分からないが、現代では年末も押し迫ってからという例が多い。12月31日が52例、12月30日が46例、後の回答は29日、28日、そして年末と答えたのが12例である。そして、何日までそれを飾って置くのかという設問に対して、3日(10例)までだという答えから、4日(1例)、5日(4例)、6日(1例)7日(45例)、8日(3例)、10日(12例)、11日(11例)、14日(11例)、15日ぐらいまで(26例)で、この設問に対する回答として際だった印象があるのは12月31日の満潮時から1月7日とした例である。もう一つは、処分する日がドンド焼きの日という例である。3日が10例あるということは、3日だけで正月が終わるすばやい形の、いわば、休日型の正月といえるのではないだろうか。また、7日が正月の終わりと意識されているのは、学校の休日がこれと同じであることも無視できないのではないか。それと松の内の意識が投影されていることもいえる。しかし、10日、11日にも飾りを取り外す日となっている例があり、そこまで正月の意識が連続しているようにも思える。そして、次のピークが14日、15日の両日となる。小正月の考え方がここに現れているのだろう。

一口に注連飾と言っても、その造形は地域によってかなり違いがあり、興味深いものがある(付図参照)。

07 松飾りや門松に類するものをたてる17.6%。門松をたてるのは西南日本では少ない。この回答のほとんどが松飾りである。

08 鏡餅を飾る94.8%。飾らない5.2%で圧倒的に飾る家が多く、鏡餅は正月を迎えるに当たっての必要欠くべからざる条件であるといえる。ただ、それが真空パックのそれであるのか、どうかについてはここでは分からない。

鏡餅をどこに飾るかという質問に対して、床の間95例、神棚42例、仏壇25例、玄関11例、テレビやステレオの上9例などである。

妻が主導で鏡餅を飾る78例で約50%。夫の主導

51例。このうち夫と妻の協同が10例などとなっている。これについて祖母が中心になる例は7例、祖父が3例である。ちなみに、子どもが鏡餅を飾るのを手伝う例は4例のみである。

つまり、鏡餅を飾るのは妻の役割である家庭が多いということになる。

正月飾りは夫が主体で行うという回答が33%であり、夫の関わり方もまだ多いともいえるが、しかし、全体として、主婦が鏡餅を中心とする正月飾りの主体である場合が多いことが分かる。

鏡餅を「床の間に飾る」「座敷に飾る」を含めて89例で、神棚16例、玄関8例、仏壇5例、テレビの上5例、ステレオの上2例、サイドボードの上2例、店、洋間、会社、農機具の上、車の上等となっている。「床の間」が圧倒的に多いが、1戸建ての場合、座敷に装飾空間としての床の間がある例が多いからである。

09 鏡餅の他に飾りやお供えをする例は54.9%で床の間58例、神棚53例、仏壇49例、台所29例、自動車21例、子供部屋19例、机10例、便所11例、玄関6例、井戸2例、自転車、バイク2例、ミシン、ピアノ、工場の機械、農機具、倉、納屋、柵櫃各1例などで無回答は69である。

床の間に重箱に米と塩をいれ、供えるものが1例あり、栗、餅、米、柿を供える例もある。台所、便所、自動車には小さな注連飾りをする例が多い。

これらの飾りを誰がするのかという質問に対して夫が35例、妻が19例、夫と妻が二人でする7例となっている。ついで、祖母3例、祖父1例。

この質問に対して、子どもが手伝いの形でも登場するのは4例のみとなっている。無回答は69例である。

10 床の間には鏡餅の他、松竹梅などの正月用の花を活ける50例、鶴亀や正月用の掛軸を掛ける31例、少数例だが羽子板や破魔弓、干支の買物が置かれたり、大黒様が置かれたりする例がある。

11 8, 9, 10の設問に対する回答と重複のため略。

12 大晦日にそばを食べる90.2%で「運蕎麦」「年越し蕎麦」の他に首尾一貫のしるしとして尾頭付の魚(鯛)や鯨を食べるという例や、そばとすき

やきのセット、「まぜご飯」、寿司におせち、少し改まったもの沖縄そばに肉汁「アシティビチ」の例もある。これを大別すると次のようになる。

1: 「うんそば」「としこしそば」だけ79%

2: そば+魚3.3%

3: そば+他の料理3.9%

4: 特別な料理3.3%

5: 無回答9.8%

大晦日に就寝する時間帯は、明けて元旦の午前0時30分から3時頃までの間である。

13 初詣に出かけると答えたのは75.2%、初詣に出かけないのは24.2%、無回答0.7%である。

14 若水汲みをするのは9.8%でしないが88.2%、14-2 元旦に朝風呂にはいるのは、30.1%、入らない69.9%

14-3 お茶を飲んで正月の挨拶をする42.5%、しない57.5%

14-4 歯がためをする10.5%、しない86.9%、無回答2.6%。歯がための意味そのものが理解されていないケースが多い。従って、屠蘇を飲む時同時にするめや昆布を噛むのが歯がために類することだという考え方はないようである⁹⁾。

14-5 元旦にあたり何かを拝む69.9% 拝まない28.8%となっているが、具体的に何を拝むのかという質問に対しての回答は次のようになっている。

	YES	NO
御鏡	10.3%	89.7%
神棚	66.4%	33.6%
仏壇	74.8%	25.2%
その他	17.8%	82.2%

従って、実際には仏壇、つまり祖先に対する礼拝は75%の家庭で行われていることになる。

その他の内容は、初日の出、氏神様、火の神、水神、大黒様、観音様等になっている。

14-6 屠蘇または御神酒を飲む85.0% 飲まない13.7%。屠蘇または御神酒を飲む順番は、長幼一男女の形が多いが、これも一定したものではなく、例えば父一こども(男子とは限らない)一母のように妻が最後のパターンもあり、男女の別なく年が若い順、幼長の順に飲んで行く場合もある。予

備調査の事例3にあるパターンと同様である。

14-8 お年玉を用意する、88.2%、しない11.1%、無回答0.7%。お年玉については正月になると必ず新聞にその是非や、是非の論議からそもそもお年玉とは何であるかという議論が沸き上がる。しかし大学生たちの正月についての印象は、お年玉がいくらもらえるかということが主要な関心事であるように見受けられる。

15 雑煮を食べる95.4%、食べない2.6%、無回答2.0%。雑煮は各家々で作り方の流儀が違うが、味噌を使う例はきわめて少ない。だしは昆布、鰹節、煮干(イリコ)、かしわ、焼きアゴが主なものである。

雑煮の中身についての問いに対して多く書かれている順に品目を列挙すると次のようになる。

だし

昆布・鰹節・煮干(イリコ)・かしわ・
焼きアゴ・椎茸・スルメ・干し海老
塩・醤油・砂糖・酒・味醂・化学調味料・味噌

具として中に入れるもの

- 煮餅、焼き餅(丸餅、角餅)
- ブリ・鮭・鯛・あなご・鮎・鯨・スルメ・
かしわ・うずらの卵・いくら・鰹節
- 鰹菜・高菜・白菜・水菜・京菜・三つ葉・
春菊・ほうれん草・ねぎ
- 蒲鉾(板付き・鳴門・カステラ蒲鉾)・
ちくわ・てんぷら
- 焼き豆腐・豆腐・高野豆腐・油揚げ
- 大根・人参・椎茸・里芋・蓮根・モヤシ・大
豆・あずき・ぎんなん・竹の子・ごぼう・か
んぴょう・こんにゃく

各家庭で雑煮の中身は異なっているが、餅に魚介類や鶏肉、菜類、すり身のもの、豆腐、根菜類のはいるものだということができる。

17 正月行事の行われる部屋は座敷(床の間のある部屋)56例、客間4例、居間45例、茶の間4例、和室4例などである。このうち居間で過ごすと回答した例を次の質問項目でみると和室、もしくは板の間であっても床座が多いことがわかる。

18 正月料理用食卓は、長方形の座卓65例、こた

つ57例、ダイニングテーブル25例、円形の座卓2例、銘々膳1例となっている。朝食はダイニングテーブルで、昼食は長四角の座卓という回答が1例ある。

この結果からみると、正月は和室で座卓やこたつを使う食事の仕方が圧倒的に多いといえることができる。

空間と食卓の関係でみると、座敷でこたつが使われる例は7例のみで、座卓が使われる例が43例となり、「座敷一座卓」の緊密な関係がわかる。一方、45例の居間では32例のこたつが使われ、「居間一こたつ」の関係が緊密であることがわかる。これもこたつの甲板が、長方形で、質の高いものとなれば、こうした関係も崩れてくるのかも知れない。

18-2 無回答が多いため略す。

19 正月の元日に使う箸は祝い箸、柳の箸が多く、栗箸、普段と変わらぬ箸などとなっている。

20 正月に決まった遊びをする13.7% しない83.7%

21 年始に行く、または年始客がくると回答したのは62.7%。どこに年始に行くかあるいは誰が年始に来るかということ、妻や夫の実家、親戚がほとんどである。正月はこうした親族の絆を確める機会であることが分かる。

22 事始めの習慣はない88.9% ある6.5%。

23 何日まで正月と考えているかという設問に対して、3日が57%、7日19.6% 5日7.8%という順になっている。

24 七草がゆを食べる47.1% 食べない50.3%

25 鏡開きをする56.7% しない41.8%

26 小正月の行事をするのは5.9%できわめて少ない。

27 女正月の行事が行われる例は1例(0.7%)のみである。

4. まとめ

予備的な聞き取り調査をもとに調査票を作成し、北部九州の40才代から50才代の、しかも1戸建てを中心とする家庭の正月行事のありようを調査し

た結果、以下の事が特徴として挙げられる。

正月は3日までとする考え方が57%で、日常生活の意識に戻るのは早いですが、注連飾は7日まで飾られる。年末の大掃除をするのは92.2%で、その半数は家族全員で行われること。

注連飾が玄関を飾るのは86.9%の高率である。鏡餅が用意される家は94.8%であり、その半数以上は大きな鏡餅の他に神棚や仏壇にお供えをする。注連飾や鏡餅の形は限られた地方だけでみても多様である。

大晦日にそばを食べる家庭は90.2%。屠蘇、または御神酒を飲むのが85.0%。雑煮を食べるのは94.5%。お年玉を用意するのは88.2%。

正月行事の行われる空間は和室か、そうでなくても床座の場合が81.8%、ダイニングテーブル(食堂セット)が使われるは16.1%である。

正月行事の基本的な内容は、大掃除、注連飾、鏡餅、年越しそば、屠蘇または御神酒、雑煮、お年玉、そして床座だといえることができる。

これに次いで、御歳暮(69.9%)、初詣(75.2%)、元日にあたり何かを拝む(69.9%)、実家か親戚に年始に行く、または来る(62.7%)などが挙げられる。

半数くらいになるのが鏡開きをする(56.7%)、縁起物を買う(53.6%)、七草がゆを食べる(47.1%)、餅をつく(45.1%)、お茶を飲む(42.5%)で、朝風呂にはいる(30.1%)が続く。

しかし、若水汲み、歯がため、正月の決まった遊び、事始め、小正月、女正月等はほとんど行われない。

正月の挨拶をするのは88.2%となっている。

正月行事が形式を持って進行する、あるいは威儀を正して行われる条件として、室内の構成が関係すると考えられるが、もう1つの条件として、見逃してはならないのが3世代同居であるか、核家族であるのかということが考えられよう。生活の慣習が伝承されるためには、同居老人の役割は大きい⁶⁾。

また、正月を迎えるに当たってマスコミの動きも無視できない要素である。

年末になると新聞の折込広告は日増しに喧騒の度合を強める⁷⁾。

広告と共に、年末には正月飾りや料理の持つ意味や、年越しそばのいわれの解説記事が目だってくる。

こうした動きの中で、一通りの事はしなければならぬという気持ちも醸成されるのではないだろうか。

今後更に、現代の都市生活者の正月行事の行い方と、家族の関わり方、また、都市住宅における正月行事を象徴する装飾(飾り、お供え)の詳細を調査し、居住文化の精神的側面、地域性、今日的課題を明らかにして行きたい。

謝 辞

この報告を記すに当たり、次の方々にお世話になった。

日田では大分県日田産業工芸試験所の久津輪勝男氏、須恵町歴史民俗資料館の高山慶太郎氏、そして多忙な中、正月行事についてお話し頂いた草野覚子さん、高瀬重市さん、田原貞敏さん、田原ひさよさん、印藤弥寿男さん、印藤弘子さん、そして、調査に理解を示し、調査票を郵送して頂いた方々にお礼申し上げる。

また、協力してくれた学生諸君にお礼申し上げる。本学デザイン学科の諸先生がたにもご迷惑をおかけした。ここにお礼申し上げる次第である。

なお、この報告は(財)ベターホーム協会の昭和63年度研究助成を得て行った研究成果の一部である。

この報告の一部は第14回日本生活学会春季研究発表大会で発表したものである。

注

- 1) 昭和29年に文化財保護委員会告示第59号「記録作成等の措置を講ずべき民俗資料選択基準」が定められ、正月行事については、新潟・秋田(昭和30年) 三重(32) 島根(32) 埼玉・長野(35) 岡山・鹿児島(37) 岩手(37) 大分(39)の民俗資料記録作成がなされている。これらの記述を見ると各地の正月行事は多様である。

る。

- 2) これに近い風習では、福岡県のオイオがある。新婚の家からは必ず里親に贈ってくるのでヨメゴブリという名もあり、これらはよく人目に付くように掛けておかななくてはならない。四国では、カケノイオといい、長崎ではシャア木、幸い木という同類のものがある。
- 3) 檜の棒で餅をつくのは、島根県大田市の、臼を子供に引かせながら、往来で餅つきをする光景にもみられる。また女をおいかける行事として島根県の笠浦の龍神祭りがある。手名槌、足名槌と称するすりこぎの様なものを持った者が女を追いかける。このすりこぎの様なものでたたいて貰うとよくはらむという。
- 4) 民俗学研究所編『総合日本民俗語彙』第3巻平凡社1985 P1351「年取に必ず飲むことを福茶といっているところも多い。しかしこれは茶の普及より後の事であって、必ずしも古い習俗とはいえない」
- 5) 民俗学研究所編『総合日本民俗語彙』第3巻平凡社1985 P1207「長野県の上・下伊那郡は元旦に家内中で柿、栗、豆で茶を飲むことで…同県北部山村には大根、蕪を食う歯固めもあり、…中国地方でも干柿、栗を使う…長崎県佐世保市外の村々では、年初の祝言の後にはまず干し大根をうすく輪切りにして梅酢でつけたものを、歳徳神の方に向かって食べ、それからすめ、昆布、蜜柑、柿その次に酒と数の子を食べてから雑煮を祝う。」
- 6) 今日の正月行事に対して富岡多恵子は次のように述べている。「核家族では、家長が家族から次つぎに挨拶を受ける、というような光景は出現しにくい。家族の中で、改まった挨拶の口上を述べられるのは、年長者が大真面目にそれをやってきたのを見ているからで、友達のようなパパやママに向かって、挨拶をといわれても急にできるものではない。…どうしても四角ばったマナーは遠ざけられ、カジュアルな感じになってしまうのである。」朝日新聞 1988年1月1日。
- 7) ざっと年末年始の広告を眺めると、強烈な文字が目飛び込んでくる。

「ボーナス商戦、お歳暮超特価ベストセレクション、歳末ビックバーゲン、売り切りファイナルセール、お正月準備用品大会、ラストバーゲンセール、大歳の市、歳末市、歳末大売り出し、大特価、スーパーディスカウント、年末の必需品勢ぞろい、歳末特別大感謝セール、年内配送・取り付け、生鮮激安大市、歳末大特価祭、半額セール、50%から30%OFF、エキサイトウィーク、超特価宣言、歳末謝恩大販売、超目玉満載、歳末大忙祭、爆発特価、御問屋倒産山積大処分、倉庫大バー

ゲン、歳末特別大奉仕、年末大奉仕セール、全館一掃年の瀬最終底値、さよなら徹底バーゲン、どん底価格宣言」

そして年が明ければ

「初売り、お正月用品大奉仕、新春朝市、新春吉例初売出し大市、新春福福市、大開店祭、新春初売り出し、新春特価、新春半額セール」

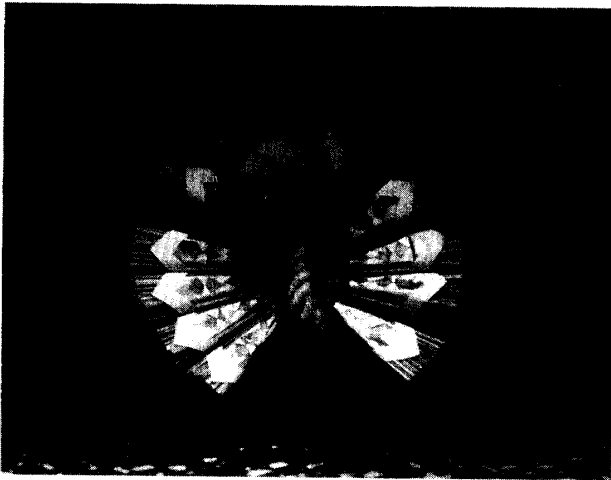
等々、挙げればきりが無い。



付図1 注連飾り 福岡県



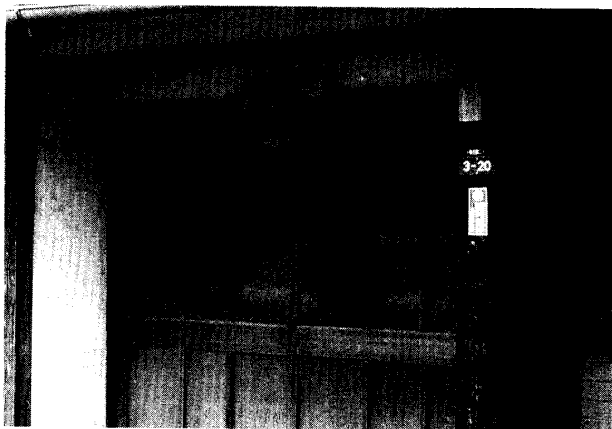
付図2 注連飾り 長崎県壱岐郡



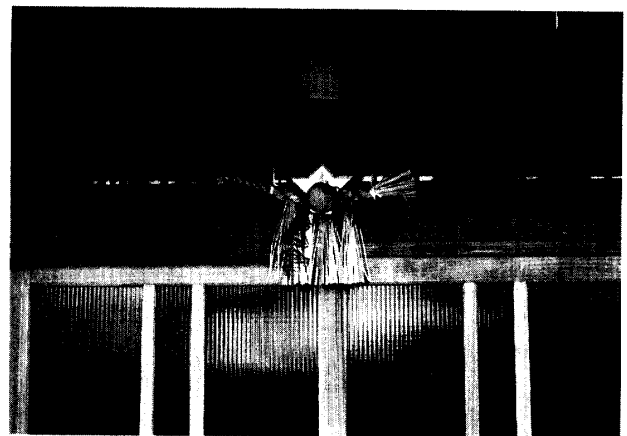
付図 3 注連飾 福岡県飯塚市



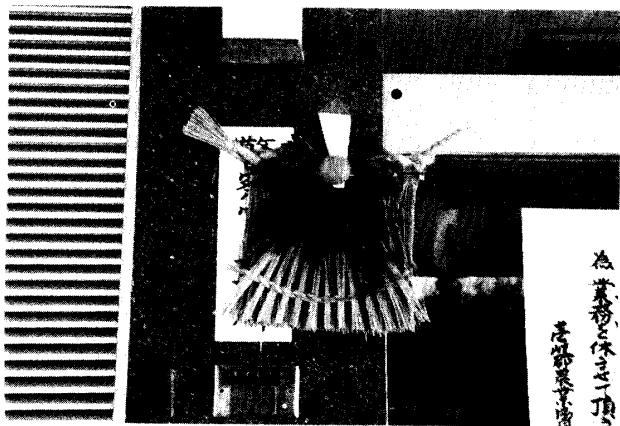
付図 6 注連飾 佐賀県



付図 4 注連飾



付図 7 注連飾 佐賀県



付図 5 注連飾 長崎県佐々市



付図 8 印刷された注連飾と松飾り



付図9 車の注連飾



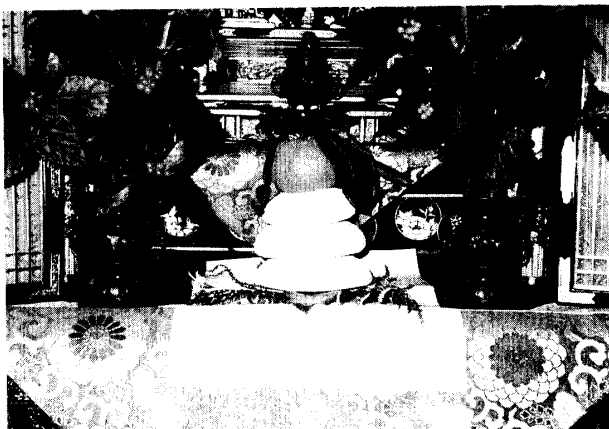
付図12 神棚の飾りと供え 福岡県添田町



付図10 床の間の鏡餅 福岡市



付図13 床の間のしつらえ 長崎県壱岐郡



付図11 仏壇の供え 3つ重ねの鏡餅